北海道医報
ISSN 0913-0217　2019.5.1. 第1208号
発行人　北海道医師会長　長瀬　清
編集人　情報広報部長　山科　賢児

季節風

新元号「令和」となって
―時代は動き出すか―

情報広報部長　山科　賢児

新しい元号が平成31年4月1日「令和」に決まった。皇位継承以前の元号の発表は憲政史上初めてであり、決定した「令和」の施行まで1ヵ月間あるのも不思議な感覚である。新元号の発表前は、昭和の終わりのような自粛ムードはなく、平成を総括する書籍が多く出版され、インターネットやテレビは新元号の予想で盛り上がった。社会は全てのリセットを期待するかのように、明るい雰囲気であった。

元号は古代中国に起源を持ち、東アジアの漢字文化圏の特有の制度であり、権力者が人々の時間を支配する意味を持っていた。朝鮮やベトナムにも元号は広まったが、現在使われているのは日本のみである。幕末までの約250回の改元のうちほぼ100回が、凶事が起こるとその影響を断ち切るための災異改元（さいいかいげん）であった。天皇の代替わりによる代始改元（だいはじめかいげん）だけでなく、大地震や火災、天変地異、疫病の流行を引き起こす怨霊を追い払い、新しい世の中を創るためにも改元が行われていたのである。明治政府は一世一元制の元号を採用し、国家と国民との一体感を作ることを意図した。象徴天皇制の現在、日本は国民主権となり、元号自体は西暦と同様に年を表す記号となっているが、元号には時代の雰囲気や共有感を表現する日本の独特の文化が根付いている。

「令和」の出典元が、645年の大化以降初めて漢籍でないことが話題となった。日本最古の歌集「万葉集」の「梅花の歌三十二首」（天平2年、730年）の序文「初春令月、気淑風和」（初春の令月にして、気淑（よ）く風和ぎ）に由来する。一方、万葉集（780年頃成立）以前の中国の詩文集「文選（もんぜん）」（530年頃成立）に似た漢文がある。後漢の文人張衡が詠んだ「帰田賦（きでんのふ）」には、「於是仲春令月、時和氣清」（これにおいて仲春の令月、時は和し気は清む）とある。

天平は芸術や文化が花開いた時であったが、地震や疫病や飢饉と政変の時代でもあった。天平の人々は、王羲之の書で有名な蘭亭序に記されているように、悪を追い払う宴を催し世の平和や安定を願い、その思いを和歌で表現したのだろうか。「令」と「和」の組み合わせが、出典の和歌では関連性がない、帰田賦は、張衡が政治腐敗に耐えきれず帰郷した時の詩であるなど、「令和」の妥当性に疑問も出されている。しかし元号を記号と承知し、決まった「令和」を丁寧に育て使うことが重要でないだろうか。新元号はいずれ馴染むはずであり、相応しい時代を創ればいいのである。

元号と時代の出来事には因果関係はないはずだが、改元が時代の気分を一区切りにするよい機会ではないかと考える。元号の境目で過去を振り返り、現在を変えたいという空気を読み、未来を描く。日本は勘や雰囲気で決断し、「他よりまし」と流され、風が吹けば簡単になびく傾向がある。メディアも伝えるべきことを伝えていない状況もあり、社会全体が委縮し、分かっていてもあえて声にすることなく無難な選択をしがちである。人々の心には、災害や社会の分断や硬直化した政治に、変化を求める気分が封印されているのを感じる。「反対し抵抗しても傷つくから傍観する」諦めが社会に蔓延して、現状維持や先送りが続いているような気がしてならない。

この北海道医報5月号が届く頃は、すでに新天皇が即位して「令和」の時代が始まっている。即位以降も大嘗祭などの行事が続き、国民の「令和」への関心がさらに高まるだろう。年号は従来通り西暦との併用は続けられ、「令和」になっても特別な時を刻むわけではない。時代は、顧みれば創られたものでもあるが、前を向けばこれから創るものである。「令和」をどのような時代にするのかは、人々の意識と行動次第ではないだろうか。

最近の「季節風」では旬の出来事を題材にして「木を見て森を見ず」とならないように留意している。日々の臨床現場から社会の動きを推し量り、同時に世の中の潮流を考察する、そんな内容になればと願っている。社会に目を向ければ、日本は悲しいくらい崩壊し始めている。改元が日本の現状打破のきっかけとならないか、人心一新の起爆剤にならないか、そのような期待を抱いて「令和」を迎える。

発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011) 231-1432　FAX (011) 221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 250円（税別）